学苑　第八七四号　一九～二九（二〇一三・八）

〔資　料〕

一枚摺の世界

――その小釈の試み

阿部　美香・寺津麻理絵・関口　靜雄

〔解　題〕

書画・骨董の世界で、木版・銅版・石版などで摺ったものを広く「すりもの（摺物・刷物）」と呼び、そのうち紙一枚に摺ったものを「一枚もの」とか「一枚摺（刷）」と呼ぶが、文字のみのもの、絵・図入りのものがあり、紙形も正方・長方・菱形・扇形があり、かつ大・中・小があって、摺面に記された内容たるや、止まるところを知らぬほど種々多様である。

興味の範囲から思い付くままに挙げても、浮世絵・錦絵・死絵・上方絵・武者絵・相撲絵・祝儀絵・玩具絵・宝船・絵伝・一代記・大小暦・番付・引札・納札・藩札・略縁起・境内図・参詣図・涅槃図・地図・図彙・御影・俳諧摺物・芝居案内・節用・双六・面子・瓦版・立版古・効能書・勧進募・意匠・雛型等々、一枚摺の世界は際限なく広く深い。

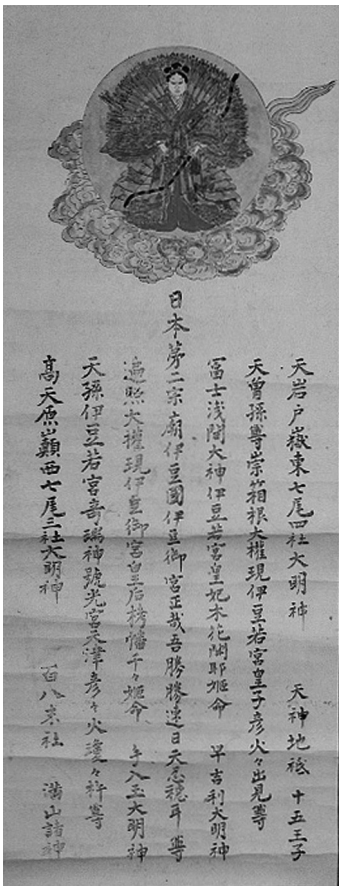
大田南畝の『半日閑話』に「江戸難風大騒一枚摺出る」（明和九年八月）、「十八日より江戸自慢と云一枚摺出る。江戸名物を役者番付にしてうるもの也」（安永五年十二月）、また『御触書天明集成』に「近来暦類紛敷板行致し候もの有之旨相聞、甚以不埒之至候、向後略暦并大小之類、一枚摺之品ニ候ても、聊も暦ニ似寄候品之類売買は勿論、辻売等堅く致させ間敷候」（天明四年九月付、触書三一九六）とあるのをはじめ、江戸時代の記録には「一枚摺」の記事が頻出する。ことあるごとに版行されていたのである。

わが国の一枚摺の起源を制作年代が明確な世界最古の印刷物とされる、称徳女帝発願の神護景雲四年（七七〇）の百万塔陀羅尼に求めるならば、一枚摺の歴史はきわめて古く、内容の優劣・資料としての軽重を問わず、たった一紙の「すりもの」によって情報を発信しようする伝統は、わが国の文化遺産として誇るべきものかと思われる。情報機器が発達し、居ながらにして世界中の情報を瞬時に入手できる時代になったとはいっても、新聞の朝刊には一枚摺の折込広告が大量に挟まれ、商店街・繁華街を歩けばチラシ・ビラ・フライヤーのたぐいが否応なく手渡されるのである。紙媒体の情報伝達が急速に消沈していると噂されるが、しかしこと一枚摺に関しては、むしろ激増しているように思われる。

書画・骨董に携わる人たちが、一枚の「すりもの」を指して「一枚もの」とか「一枚摺」というときは、その摺物の属すべき分野が確立していない場合が多い。浮世絵や錦絵、引札や納札、俳諧摺物や番付などはそれぞれに多くの好事家がおり、確かな研究分野と認められて優れた研究報告が積み重ねられている。しかしたとえば、仏菩薩の像容を描いたいわゆる御影は、「ごえい・みえい・みえ・おみえ・おすがた」などと多様に呼ばれ、また「仏版・仏版画」の名称で一括りにされる。さらにその一枚摺の御影は表装されて掛軸・幅物と呼ばれ、巻子に仕立てられて巻物と呼ばれ、特別な扱いを受ける。

そうしたいまだ確固とした分野の定まらぬ、従来研究の対象とされることのほとんどなかった「一枚摺」を取り上げ、その一々について小釈を試みようと思う。なお、各項冒頭に掲出した「一枚摺」は、断らぬ限りすべて宮島コレクション（東京都江戸川区）の所蔵資料である。

1. 伊豆国伊豆御宮御神号



木版彩色　七〇・五×二七・〇cm
江戸時代末期

天岩戸嶽東七尾四社大明神　天神地祇　十五王子
天曽孫尊崇箱根大権現伊豆若宮皇子彦火々出見尊
冨士浅間大神伊豆若宮皇妃木花開耶姫命　早吉利大明神
日本第二宗廟伊豆国伊豆御宮正哉吾勝勝速日天忍穂耳尊
（天照大神）
遍照大権現伊豆御宮皇后栲幡千々姫命　手入玉大明神
天孫伊豆若宮奇瑞神号光宮天津彦々火瓊々杵尊
高天原嶺西七尾三社大明神　百八末社　満山諸神

「日本第二宗廟伊豆国伊豆御宮」とは、現在も熱海市伊豆山に鎮座する伊豆山神社のこと。かつて伊豆大権現と称された神々の体系を、主尊「正哉吾勝勝速日天忍穂耳尊」を中心に一堂にあらわした掛軸である。

注目されるのは、「遍照権現」と称される后「栲幡千々姫」、若宮「天津彦彦火瓊々杵尊」と共に、若宮の后として富士浅間神、皇子として箱根権現の神が登場する点である。「伊豆御宮」は、伊豆山にとどまらず、富士や箱根と結ばれる広大な世界を領していたのであり、その東西には七尾七社（四社と三社）が、世界を枠取るように配されている。

この神号の拠り所となる縁起が、般若院別当周道が編纂し文化十一年（一八一四）に刊行された『伊豆国伊豆御宮伊豆大権現略縁起』[1]である。「夫、伊豆御宮は、かけまくもかしこき天照太神第一の皇子、正哉吾勝々速日天忍穂耳尊にして、日本第二の宗廟と崇め、関東の惣鎮守なり」と始まるこの縁起書には、神号に名を連ねる神々のことが説かれている（但し、富士浅間神についての言及はない）。

周道は、伊豆大権現の別当寺であった般若院において寺務を預かり別当を務めた人物である。山内の石の祠の建立や末代上人宝筐印塔の再建など、いまに伝わる様々な事績を整理すると、それらは伊豆山復興と関わっていたことが確認できる。[2] 文化九年（一八一二）、周道は秀吉の小田原攻めによって焼失した伊豆山を徳川家康の帰依を受けて復興させた般若院初代別当快運の二百年遠忌を催した。その翌年、幕府に修造のための勧化を願い出で、翌文化十一年三月には、平安時代後期に鳥羽上皇の帰依を受け富士山に一切経を埋納した末代上人の一千遠忌供養を開催している。それらは、時の世に、家康の威光のもと、富士とも連なる伊豆権現復興の意義を世に広く知らしめるうえで、大きな効果を発揮したことだろう。それに応えるように、同年十月、府内と武蔵相模伊豆駿河甲斐の五カ国における三年の勧化の許可が下りる。『略縁起』の開板と刊行は、まさにこの年のこ

とであった。『略縁起』は勧化の要として編纂され、神号も一具のものとして開板・頒布されたのではないか。

周道は、『略縁起』と神号の開板を通して、伊豆大権現の神々の世界に、当時の国学や神道界の運動とも連動した、新たな息吹を吹き込んだ。まず、神号の上部、雲に乗って影向する神鏡のなかに、アマテラスが描かれていることに注目したい。みずらを結い、背に千箭の靫と五百箭の靫を負って、弓を持つその特異な姿は、高天原にやってきたスサノヲと対峙し誓約するアマテラスの象徴的な図像である。『日本書紀』に記されるアマテラスの姿を図像化したこの尊像は、伯家神道伝来の像として、宝暦年間に学頭森顕胤の教導を受けた富士吉田・河口の御師たちを介してその後広まったものであるらしい。[3]

一方、『略縁起』には、正哉吾勝勝速日天忍穂耳尊と七尾七社の神々が、アマテラスの誓約によって生まれた皇子であることが、口決として記されている。これらを踏まえると、御神号は、当時世間に広く流布していたアマテラスの図像を導入し、アマテラスを頂点とする伊豆大権現の神々の体系を文字であらわした、画期的な所産であったことが見えてくる。そこに象られた神々の系譜を図にあらわせば、【資料一】のようになる。

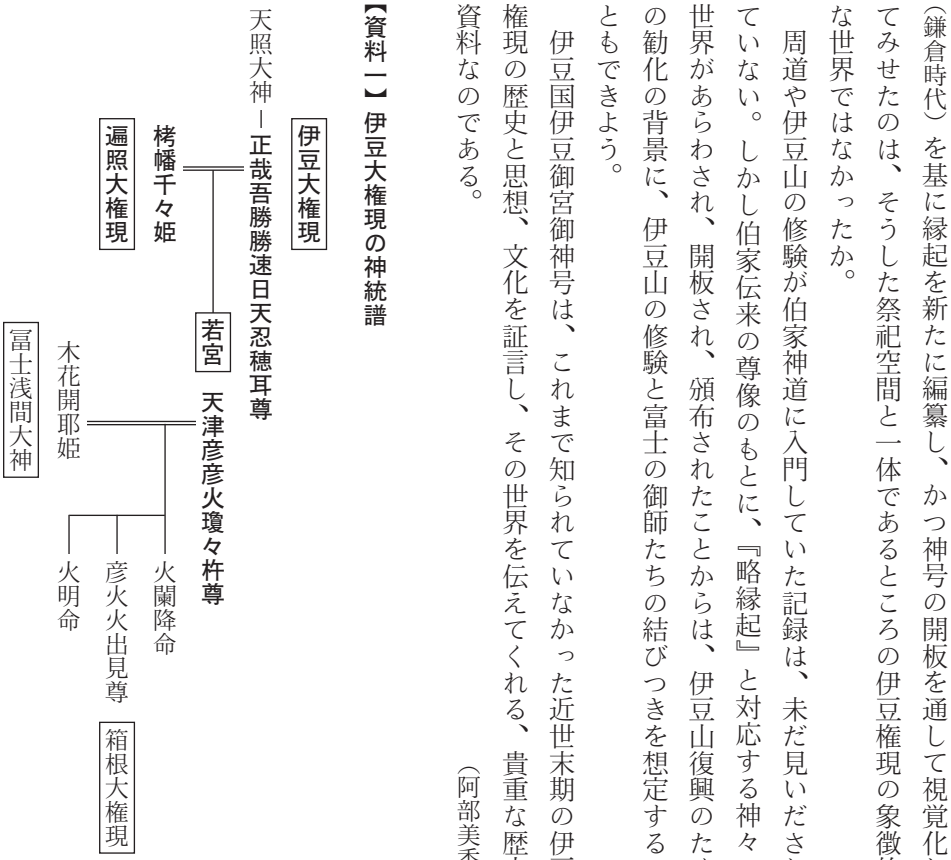
いまここに、御神号を介して、神々の祭祀空間をイメージするとしよう。主尊天忍穂耳尊を祀る神殿の背後には、天高く「岩戸山」が聳える。それはアマテラスが復活を遂げた「天岩戸」であり、同時に『略縁起』に伊豆の神々の降臨の地と記される「高天原嶺」でもあった。その「岩戸山」を挟んで東西に、かつては七尾七社が祀られていた。また、神殿の内部に目をむけてみれば、天忍穂耳尊の許に、従神である早吉利大明神と手入玉大明神が控える。天忍穂耳尊は伊豆山において月鏡として現れる存在でもあった。そのとき、早吉利を「剣」、手入玉を「玉」と観ずれば、その祭祀空間は三種の神器を祀る場として立ち現れてくる。周道が、代々の別当に継承されてきた伊豆大権現の縁起書である『走湯山縁起』『走湯山秘訣』（鎌倉時代）を基に縁起を新たに編纂し、かつ神号の開板を通して視覚化してみせたのは、そうした祭祀空間と一体であるところの伊豆権現の象徴的な世界ではなかったか。

周道や伊豆山の修験が伯家神道に入門していた記録は、未だ見いだされていない。しかし伯家伝来の尊像のもとに、『略縁起』と対応する神々の世界があらわされ、開板され、頒布されたことからは、伊豆山復興のための勧化の背景に、伊豆山の修験と富士の御師たちの結びつきを想定することもできよう。

伊豆国伊豆御宮御神号は、これまで知られていなかった近世末期の伊豆権現の歴史と思想、文化を証言し、その世界を伝えてくれる、貴重な歴史資料なのである。

（阿部美香）

【資料一】伊豆大権現の神統譜



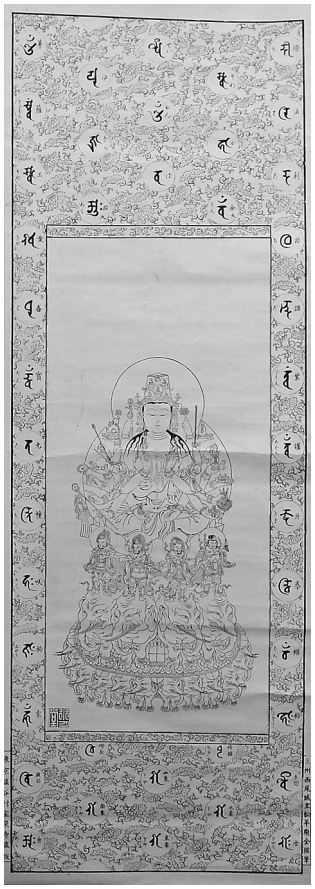
【注】

1 『神道大系』（神社編二十一・三島箱根伊豆山）

2 『熱海市史』上巻

3 竹谷靱負『富士山の祭神論』（岩田書院、二〇〇六年）

2. 松平乗全筆室泉寺蔵版「普賢延命菩薩像」



木版墨摺　一二一・〇×四二・五cm
明治時代

東京渋谷区の源秀山室泉寺（現、高野山真言宗）が出した「普賢延命菩薩像」である。画中に「三州西尾城主松平乗全侯筆」、「東京渋谷村室泉寺蔵版」とあることから、愛知県西尾の藩主であった松平乗全が作画し、室泉寺が開版したと知れる。

松平乗全（一七九五―一八七〇）は三河西尾藩六万石の第四代藩主で、「安政の大獄」の時の幕府老中職であった。幕末の混乱期に重責を担っていた乗全は、世の泰平を祈り、心の平安を求めて仏教に深く帰依した。また書画・詩歌を愛し、とくに画才に優れた乗全は、安政五年（一八五八）、師檀関係を結んでいた越中立山の芦峅寺宝泉坊に「立山曼陀羅」を模写して寄進するなど、卓越した画才と強い信仰心を有していた。

室泉寺はもともと浄土真宗西本願寺派の寺院で、江戸の芝金杉の地にあったのを、泉州大鳥の神鳳寺を中興した快円恵空が譲り受け、下渋谷村の松平忠益の抱屋敷を拝領した際に、元禄十三年（一七〇〇）二月、寺社奉行に願い出て現在地の渋谷区東三丁目へ移った。このとき室泉寺は覚彦浄厳が開山した江戸湯島の霊雲寺の嘱下に入り、明治初年まで霊雲一派であった。快円は延宝元年（一六七三）に浄厳に菩薩戒を授けており、その法縁は三十年の時を経ても変わらなかったと察せられる。

覚彦浄厳は寛永十六年（一六三九）河内国錦部郡鬼住村（現、河内長野市神ガ丘）に生まれ、高野山で修行後、延宝五年（一六七七）生誕地に薬樹山延命寺を創建した。元禄四年（一六九一）には徳川五代将軍綱吉から江戸湯島に三五〇〇坪の寺地を与えられ、真言宗関東総禄として宝林山霊雲寺を創建し、元禄十五年（一七〇二）六月二十七日、霊雲寺にその生涯を終えた。

さて、普賢延命菩薩は、普賢菩薩から派生した密教系の尊像で、災いを除き、寿命を延ばすために修する「普賢延命法」の本尊である。単独で祀られる場合は普賢菩薩像と同じく、白象の上に蓮華座を乗せ、その上に結跏趺坐した姿で描かれることが多く、真言系と天台系の二つに分けることができる。天台系は二臂の菩薩を三つの頭を持つ一頭の像が支える姿で表わされることが多く、真言系は二十臂の菩薩が乗る蓮華座を四頭の白象で支える像容を基本とする。

乗全が描いたのは、いわゆる真言系の系統を引くものであるが、白象の頭上には四天王が立っていること、そして白象を二十四頭の同じく白象が支えているというところに特徴が見られるが、これは乗全が覚彦浄厳の作例を極めて正確に模写したからである。

覚彦浄厳の開版した「普賢延命菩薩像」は、木版彩色の荘厳な作例で、画中に「霊雲浄厳印施」とあって、浄厳が江戸湯島に霊雲寺を開山した元禄四年以降に開版し、有信の人々に施したものと知れる。

印施とは、寺や神社などで、人々の利益や幸いのために、尊像や御縁起などを印版して配布することである。浄厳は「普賢延命菩薩像」のほかに

も「光明真言曼荼羅」などの、いわゆる仏教版画を多数印版している。浄厳が印施した仏版に関する記録は、高弟の惟宝房蓮体が撰述した『浄厳大和尚行状記』の末尾に付された「浄厳大和尚霊徳記」に見ることができるが、それは仏教版画を印施して衆庶を教化することの意義を、浄厳と高弟の蓮体が強く感じていた証左にほかならない。さらに「霊徳記」に「印施」の項目を採録したことも、浄厳が開版印施した仏教版画が、それだけ広く人々の信仰を集め、その功徳が多かったことをもの語っている。

『浄厳大和尚行状記』（高野山大学図書館蔵、光台院寄託本）には、

和上、常ニ諸尊ノ形像ヲ印施シ玉フ事

和尚平生真言教ノ淪墜シテ両界形像ノ参差セルコトヲ歎テ、両部ノ漫拏羅ヲ印板トシ、形像ヲ丁寧ニ考テ印相ヲ正シ、乞者アレバ紙墨ノ料ヲ弁ゼシメテ施シ玉フ。又、弁才天女ノ形像ハ、世ニ偽作経流布スルニ依テ形像モ亦仏説ニ叶ハザルガ故ニ、最勝王経ノ説ニ依テ印板トシテ有信ノ人ニ施シ、準胝仏ノ母・地蔵菩薩像・不動明王・大威徳・普賢延命・般若仏母等ノ像ヲ印板トシテ、乞ニ随テ施シ、又、光明字輪ニ両部ノ大日如来ヲ図纉シテ施シ、其ノ契約ハ皆日課ノ真言ヲ以テ定メ玉ヘリ。又、光明真言・大金剛輪陀羅尼・尊勝・宝篋印陀羅尼・三帰懺悔ノ文・臨終印明・護身法・光言七印等ヲモ印施シ玉フニ、日課ノ契約等差アリ。故ニ関八州ニ名号・字輪・血脈ヲ持セル物頗ル多シ。

と記し、真言宗内の堕落を嘆いていた浄厳が、形像を儀軌と丁寧に照らし合わせて印相を正し、印版して人々に施したと伝え、「霊徳記」は浄厳が印施した仏教版画は、関八州に広く流布したと伝えている。

浄厳は仏版を授ける際には、受者に必ず光明真言や真言陀羅尼の念誦を約束させている。このことから、浄厳が種々印施した仏版が霊雲寺の経済を支えるものであったことは容易に推量できるが、それよりはむしろ、たとえば「普賢延命菩薩像」の授受にあたって厳格な契約を結んでいたり、形像を丁寧に考えて印相を正したものを印施して世に広めようとしたことから知れるように、これが仏教版画や光明真言をもって衆庶・檀信徒を化導し、真言僧徒はもちろん、宗内また仏教界の復興を志していたものと理解されるのであり、浄厳の多岐にわたる教化の一端を考察する上で、きわめて意義深く注目すべきことである。

浄厳が開版印施した「普賢延命菩薩像」の形像はまさしく新安流の、浄厳一流の形像であって、霊雲寺および延命寺において開山和尚の遺風として重んじられていた。今ここに筆者家蔵のものを掲出しておこう。

松平乗全は、この浄厳印施「普賢延命菩薩像」をその画才と信仰心から模写し、室泉寺が霊雲寺末であった所縁をもって室泉寺に寄進し開版印施したのである。印施という方法をもって正しい形像を宗門内外、そして広く衆庶に知らしめんとした浄厳の願いはこうして一つの形となった。室泉寺蔵版乗全筆「普賢延命菩薩像」には、およそ一五〇年の時を経ても霊雲寺開山浄厳和尚の遺風が重んじられており、改めて浄厳の印施活動の影響の大きさと、その行業の偉大であったことを強く感じさせるのである。

浄厳の印施活動については、まだまだ言い足りないので後考に期したい。

（寺津麻理絵）

3. 魚籃観音御影

木版墨摺　三三・五×二四・五㎝
江戸時代

東京港区三田の浄土宗三田山魚籃寺が開版した魚籃観音の御影ふだは、右手に竹で編んだ魚籠を持ち、蓮の葉に乗った魚籃観音が右足を一歩踏み出す、その一瞬をとらえたもので、その尊顔は見目麗しく、唐様に結い上げた御髪、まろやかな肩の線に、とろけるような衣の裾を摘み上げる左手の小指はしなやかに細く、のぞく瓔珞は、この乙女が観音菩薩の化身であることを表わしている。魚籃観音はまことに美しい乙女のお姿なのである。

門前の坂道が魚籃坂と呼ばれる由来となった魚籃寺は、江戸三十三所観音霊場の第二十五番札所であり、魚籠をさげた美しい女人というめずらしいお姿から、大漁や航海安全を願う漁業関係者はもちろん、美や安産を願う女性からも人気があって、今も参詣者が絶えることがないが、かつての賑わいのありさまは、『江戸名所図会』や『江戸砂子』で知ることができる。

この魚籃寺の濫觴を、第七世住持で当寺を中興した塔誉善秀が安永三年（一七七四）に開版した『魚籃観世音菩薩略縁起』にみれば、その昔、中国唐の時代、金沙灘というところに籠をさげ、魚を売る麗しい乙女がいた。あまたの求婚者たちに仏経の暗誦ができたらとの条件をつけて、ただ一人これを見事に成し遂げた馬郎という若者と結婚することになったが、乙女はそのときにわかに没してしまう。この女性は仏法を広めるために顕現した観音であったのだ。この縁起譚は、法華経普門品に説かれる「応以婦女身得度者、即現婦女身而為説法（まさに婦女の身をもって得度すべきものには、すなわち婦女の身を現してために法を説く）」の意を説話化したものなのである。

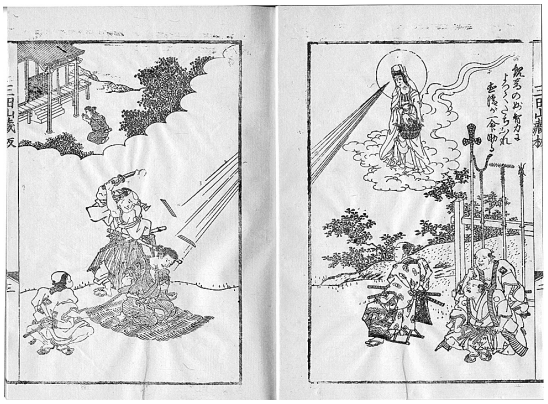
さて、舞台は日本に移り、法誉上人という知徳高い僧がたまたま長崎に遊化の折り、霊夢の導きにより馬郎の子孫から御長六寸あまりの木造の魚籃観音を託された。法誉は、元和三年（一六一七）に豊前国中津に魚籃観音を本尊として魚籃院を建立して祀ったが、その後、寛永七年（一六三〇）武州三田の浄閑寺境内に一宇を建て、魚籃観音を奉安した。その後、浄閑寺は三ノ輪に移ったが、法誉の弟子称誉が承応元年（一六五二）に跡地に新たに魚籃寺を建立し、ここに魚籃観音を祀ったもので、これが今に続く魚籃寺である。

魚籃観音の霊験はまことにあらたかで、浄閑寺のころに印版されたものや、大きさや尊像の向きが異なるものなど多くの種類が開版され、あわせてご利益を語る略縁起が上梓された。

『魚籃観音霊験記』は文政十二年（一八二九）三月に魚籃寺が開版した略縁起で、十五話の霊験譚が収載されている。いずれも魚籃観音の霊験功徳をもの語るものであるが、その冒頭第一話が剣難身代わりの霊験譚である。

寛文二年（一六六二）のころ、細川越中守殿厩の山田直清というものが罪を犯し、まさに首を討たれようとしたとき、役人の持つ太刀が三段に折れた。役人は刀を替え、再び試みるが、やはり三つに折れてしまう。奉行は不思議に思い、大守に事の次第を告げると、大守はすぐさま直清を召して問うた。直清は、自分は長年魚籃寺の観音を信仰しており、死の間際にあって一心に観音を念じたところ、観音の妙智力によって太刀が折れて、命を救われたのだと答えると、罪を赦された。直清はいよいよ信心渇仰のあまり真影を模写して生涯奉仕した。このことが巷間に流布し、剣難身代

わりの観音として信奉されたという。この霊験利益のありのままをつぶさに描いた掛け軸が宝前に捧げられ、その裏書には「現世に刀尋段々壊の御利益を蒙り奉る。未来成仏何疑歟あらむ。直清自筆也」と書き添えられた。



「観音の妙智力によつてたちおれ直清が一命助る」
（『魚籃観音霊験記』）

魚籃観音は海に纏わる観音として信仰を集めているが、こと魚籃寺にあっては、この霊験譚から身代わり観音として特に人気を集め、「身代り観世音略縁起」という一枚物の縁起が印施された。魚籃寺の本堂には『魚籃観音霊験記』の刀が段々に折れる絵場面を刻した欄間があって、今も霊験譚が息づいている。

ところで、『魚籃観音霊験記』は、この話が真言の学僧として名高い惟宝蓮体（一六六三―一七二六）の『観音冥応集』にも所載されていると伝えている。しかし『観音冥応集』には見えず、蓮体が元禄六年（一六九三）に上梓した『真言礦石集』に載っている。『魚籃観音霊験記』の誤りであるが、蓮体は『礦石集』の魚籃寺の項に「予元禄二年ニ往テ親（マリア）タリ此ヲ拝セリ」とあるように、元禄二年（一六九一）に師の覚彦浄厳に従い江戸にあった折り、実際に魚籃寺に赴いて魚籃観音を拝し、山田直清の奉納した剣難身代わりの額絵を見て、その霊験譚をも聞いたと記し、「今に繁昌の地なり」と魚籃寺の活気を伝えている。

蓮体の著作には『礦石集』『冥応集』『役行者霊験記』など仏教説話集も多いが、蓮体は生地の河内国周辺は勿論のこと、師の浄厳に従って江戸や四国へと教化に赴いた折りには、その先々で話種を伝える現地に足を運び、実際に見聞したことを著作に採録したのである。

なお『礦石集』は、この剣難身代わりの出来事を天和年中とし、刀が三つに折れるというのは、法華経普門品の偈に「刀尋段々壊」と説かれていると、その出典を明記し、『礦石集』が「講釈集」であることの充実を図っている。蓮体の学僧としての真摯な姿勢と、衆庶教化を念頭に入れた配慮を垣間見ることができる。

魚籃観世菩薩の御詠歌「身をわけて救う乙女の魚かごに　誓いの海の深きをぞ知る」は、魚籃観音のありがたいご利益を余すところなく伝えている。乙女の持つ魚籠の「かご」は観音菩薩の「加護」をあらわし、人間を悪鬼や悪難から加護をもって掬う（救う）という意味が籠められている。魚籃観音の慈悲は母なる海のように広く深く、たとえそれが罪人であっても、一心無二に魚籃観音を信じ奉れば、かの直清の時のように、顕現して必ず救ってくださるというのである。

右手に魚籠を持ち、蓮の葉に乗った魚籃観音が右足を一歩踏み出す、その視線の先には、今まさに処刑されようとしている咎人の姿が映し出されているのである。利益縁起が声高らかに語られる瞬間である。そうであれば、魚籃観音御影ふだは、たった一枚ではあるが、その利益を雄弁にかたる略縁起であり、深遠なるご利益縁起の世界へ人々を誘う一枚の招待状なのである。

改めていうまでもないが、「略縁起」は、「利益縁起」であって、経論・御詠歌・和讃・絵馬・御影ふだ等々、ご利益を説き語るものは、おおよそすべて「りやくえんぎ」なのだと心得ておく必要がある。

［付記］　本稿作成にあたり、三田山魚籃寺の山田智之御住職から御教示と御親切を頂戴いたしました。末筆ながら心より御礼申し上げます。

（寺津麻理絵）

4. 中田観音御影一心十界図

木版墨摺　九〇・〇×・三五・〇㎝
明治時代後期

旧地名から、中田観音の通称で親しまれる福島県大沼郡美里町の曹洞宗普門山弘安寺の本尊十一面観世音菩薩は、国の重要文化財に指定されている優品です。寺伝によれば、脇侍の地蔵菩薩・不動明王とともに、文永十一年（一二七四）に長者の江川常俊が娘の菩提を弔うために鋳造したもので、寺は弘安二年（一二七九）に建立されたと伝えられています。

会津三十三観音巡礼の三十番札所である弘安寺は、鳥追観音（金剛山如法寺）・立木観音（金塔山恵隆寺）とともに、長患いをしないで往生できるよう「だきつき柱」に抱きついて祈願する「会津ころり三観音」の一つであり、また安産の守護仏としても名高く、さらにこの寺で出される土守（つちまもり）は、本尊の十一面観世音像を造立した時の鋳型取りに使った土が入っているといい、旅に出ても他所の土にならず、無事にわが家に帰ることができるとされ、今も諸願を抱く多くの人々の信仰を集めています。

右の一幅は四段構成で、上段に賜紫苾芻七十二楳仙衲による賛題が「触目宝土何労、追尋六凡四聖、一念三心虚真法界、水鳥樹林、光明徧照、日昇月沈」と記され、二段目に脇侍の不動明王と地蔵菩薩を従えた中田観音の御影、三段目に一心十界図が描かれています。中央に「心」の一字を据え、その周りに地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六凡と、声聞・縁覚・菩薩・仏の四聖の十界が区分けされています。人間はこの十界の中で輪廻転生を繰り返すのですが、その原因は因果応報の道理によることが最下段に絵解きの説明文として載せられています。なお、賜紫苾芻七十二楳仙衲は総持寺貫主・曹洞宗管長を歴任した畔上楳仙（一八二五―一九〇一）のことで、賛題末尾に明治二十九年十一月とあることから、この一幅はそのころ弘安寺第十九世碩淳によって印施されたものと知られます。

ところで、野口英世の母シカ（一八五三―一九一八）が中田観音を熱心に信仰したのはよく知られています。会津の生んだ世界的な医学者で、医聖と讃えられる野口英世（一八七六―一九二八）は、かつては最も多く読まれた偉人伝中の偉人でした。磐梯山のふもと猪苗代の貧しい農家に生まれ、幼時に大火傷を負って手に障害を持ち、テンボーとからかわれ、いじめられながら、しかし貧しく辛い毎日のなかで懸命に勉学に励み、ついに世界的な医学者となって社会に貢献するまでの人物になりえたというストーリーは、明治・大正期に生きた日本人に誇りを与え、子どもたちに大きな夢を抱かせたのでした。

右の一幅が印施された明治二十九年といえば、英世が恩師の旧会津藩士で猪苗代高等小学校の訓導だった小林栄から四十円の大金を借りて上京し、医師免許を取得するために必要な医術開業試験の前期試験に合格した年です。その頃、母のシカは弘安寺に月参りした折に碩淳の絵解く一心十界図に見入っていたに相違ありません。

猪苗代湖畔の野口英世記念館には、英世が大正四年（一九一五）九月に帰郷した折り、英世・シカ・小林栄が中田観音にお礼参りした写真が展示してあり、中田観音の御影ふだが写っています。弘安寺の所伝によると、シカは毎月十七日午前一時頃になると、はるばる猪苗代から三十㎞の道のりを歩いて参詣し、観音堂に一晩お籠りをする月詣りをして英世の無事を

祈願し続けたといいます。シカは居間の壁に「めぐり来て四方の千里をながむればこれぞ会津の中田なるらむ」と詠まれた御影ふだを貼り、英世には毎年観音のお守りを送っていました。英世は十五年ぶりに無事帰郷できたのですから、シカが送り続けたお守りは土守だったのかもしれません。

英世に帰郷を決意させたのは一通の手紙でした。それは、英世自身が、「私が三十五歳の時、ある一通の手紙が日本から届きました。それは、私に日本への帰省を催促する母からの手紙でした。年老いた母が、幼いころ習った字を一生懸命思い出しながら書いた手紙。一文字一文字から深い愛情が感じられ、幾度も読み返さずにはいられませんでした」と回顧しているように、それは英世にとって、母親の「深い愛情が感じられ」るものでした。その手紙は記念館に展示されていて、「おまイの○しせには○みなたまけました○わたくしもよろこんでをりまする」で始まるあまりに有名なものですが、しかし、シカのこの手紙は手紙の形になっていません。感情のままです。愛情・苦情・願望が露わに表出し、またその文字も気合いで造形したというおもむきです。それに、当時の英世にとっては、ある意味、「貰っても困る」手紙だったはずです。おそらくこれを読んだとき、英世は息苦しさを感じたはずですが、しかし、母の「まごころ」は英世の心に激しく伝わり、それが英世に帰国を決心させる決定打となったのです。手紙の威力とはいかに凄まじいものか、無学の母親の叫びとはいかに心震わせるものなのか、おぼろげながら理解することができます。この手紙を読む限り、文面だけ読めばシカは相当なわがままです。自分の「願い」を強引に叶えようとするふしが感じられます。

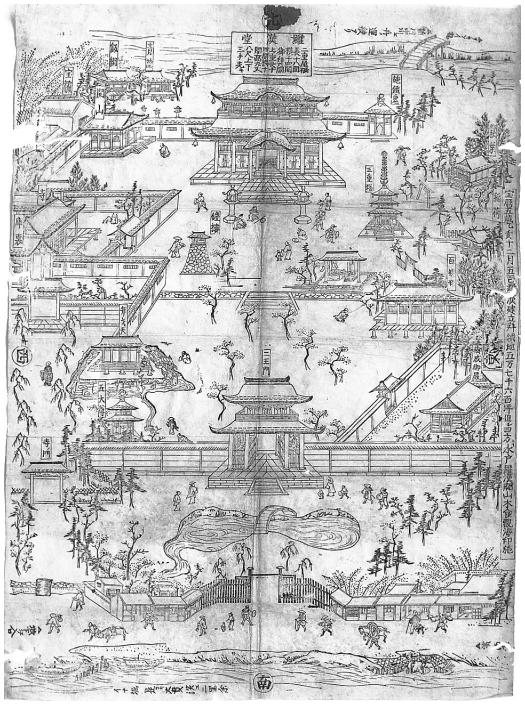
この手紙を書いた時、シカは外国で大活躍する我が子から「見捨てられる」のではないかと危惧していたのではないでしょうか。シカにとって、自分と清作を結ぶものは毎年送り続けている中田観音のお守りしかないと思っていたのではないでしょうか。お守りは清作と自分を結びつける心のよりどころのツールでした。しかし、見捨てられたなら、「息子・清作と過ごしたノスタルジア」が崩壊します。その危惧がシカに手紙を書かせた大きな理由だったように思えるのです。しつこいまでの「はやくきてくたされ」の連呼と、その返事を待ちながら、「ねてもねむられません」と記すのは、シカの心の不安と焦りが直截に表出されているように思えます。

実を云えば、英世への手紙を書くまでシカが全く文字を書けなかったわけではありません。学問の経験が無く、字が書けなかったシカは、息子に一目会いたさに囲炉裏の灰に指で字を書く練習をして手紙を書いたとされています。指導してくれたのは、ゐ少（英昌）という修験者だとも伝えられています。これが広く知られた感動譚ですが、しかし、シカは畑仕事や荷物運びのかたわら、産婆の仕事もしておりました。

明治三十二年（一八九九）に産婆規則と産婆名簿登録規則が発布され、産婆の仕事をするには講習を受け、検定試験にも合格しなければなりません。四十五歳の頃から産婆を副業としていたシカは必死で勉強し、検定試験にも合格して念願の産婆資格を得たのでした。その生涯に取り上げた子どもは二千人あまり。不思議なことにそのすべてが安産でした。その理由を尋ねられると、シカは「それはオレ一人でやってんでねえがらだし。お産の時は必ず観音さまにお祈りしながらやんのし。そうしっと観音さまがお力を貸してくれらんのし」と答えるのが常だったと伝えられています。

（元本学オープンカレッジ講師・宮島　鏡、補関口）

5. 水戸羅漢寺境内之図



木版墨摺　四八・五×三三・五cm
江戸時代宝暦五年（一七五五）

水戸の羅漢寺は巨大な木食寺だった。水戸城下の外れ、現在の水戸市酒門町付近にあったという羅漢寺は、『水戸市史』中巻（二）に載せる丹澄氏蔵『城下絵図』に、他を圧しひときわ偉容を誇る豪壮な建造物として描かれている。しかし水戸藩の天保の改革によって破却され、ついには庫裏から自火を出して悉く焼滅し尽くし、今も残る羅漢橋がわずかに名残りを伝えるだけで、その跡かたさえも失ってしまった。

『水戸市史』中巻（三）によれば、「羅漢寺は塩子（七会村）の仏国寺の木食観海が宝暦六年（一七五六）から明和七年（一七七〇）まで十四年間を費やして建立した寺で、五百羅漢像を安置し、高さ九丈二尺余、下階の間数一八間に一四間、上階は一四間に七間で、その宏壮な伽藍は数キロ先から旅人の眼に映り、縁日の物詣でには善男善女で賑わった」という。

また、文政十二年（一八二九）十一月に羅漢寺住職の舜興が水戸藩寺社方に差出した資料（前田香径氏「木食観海に就いて」〈「木喰上人之研究」四、一九七四〉所載）によれば、木食観海による五百羅漢堂の建立が明和七年八月に成就したことを伝えている。

当寺開山木食観海上人也。出生奥州岩城多賀新町、木村氏産也。于時塩子村仏国寺ニ住而諸堂建立。後心願ニ而同村十円寺ト申高根村太山寺末寺ニ而寺地有之而已。為法興隆引寺再建御願指上御聞済被下置候。源良公様御時代厚思召以当地ニ新規御除地四丁四方宝暦六年ニ拝領仰付、五百羅漢堂諸迄建仕候、明和七年八月迄成就。同年八月入仏供養仕。同九年御願之上十円寺離末罷成、此年上京仕御室御所御直末相承。院室ニ罷成被為仕上人。三月十日参内相済致下国、八月朔日登城被仰出候。暫永住仕候而奉御武運長久者也。此ニ及老衰、安永四年十二月二十四日、歳七拾八才ニ而遷化仕候。外ニ行状等筆記無之、右相分不申候。御造営等一切無御座候。

しかし、冒頭に掲出した『水戸羅漢寺境内之図』の画面右端には、

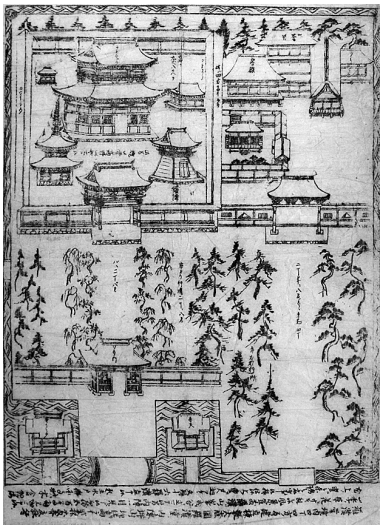
宝暦五歳乙亥十二月、五百羅漢建立。拝領地五万七千六百坪。但シ四方ナリ。
水戸羅漢開山木食観海印施

と刻されていて、羅漢寺の創建年時や寺領が、『水戸市史』や舜興の差出資料の内容とは大きく相違するのである。この刻文が事実を伝えるものだとすれば、「宝暦五歳乙亥十二月五百羅漢建立」とあり、仏国寺の住職だったという木食観海が「水戸羅漢開山」を称しているのであるから、羅漢寺は宝暦五年（一七五五）十二月にすでに建立開山されていたと見るべきだろう。おそらく観海は、五百羅漢堂の落成記念としてこの『水戸羅漢寺境内之図』を有縁の人々に印施したものと思われる。

この『境内之図』によれば、その寺領も五万七千六百坪と極めて広大で、二王門を潜れば、境内には高九丈八尺、長十八間、横十四間を誇る巨大な

二重屋根の羅漢堂を中心に、開山堂・三重塔・鐘楼・施餓鬼堂・百観音堂・弁天堂・五大尊堂が建ち並び、秋葉権現・稲荷明神・青龍権現・飯綱権現等々の小堂ほか、太守・貴顕を迎えるための御成御殿が用意されており、宝蔵も二つあり、寺の庫裏も並みの広さではなかった。羅漢寺は従来云々されていたよりもはるかに規模豪壮な建造物だったのである。

水戸羅漢寺の境内図はもう一つある。水戸市立博物館に所蔵される『墨刷羅漢寺境内之図』（四二・四×三二・〇㎝）である。同館の厚意ある御許可を得たので、ここに掲出したい。



この境内図には、画面下方に、

羅漢堂境内四丁四方ノ西ニ建立棟数大底図、羅漢堂ノ内陳坪山地ニ仕リ、柴採敷、春夏秋冬、四季ノ草花モサキ乱ノ候風景宜敷、羅漢ハ山ノ峯或谷ニ立マフ候間、内陳一目見ヘ申候。不残五百尊拝見成□申候。尤上ノ重ニ参詣之衆登申候様ニ仕候。上ノ重ニ尺加・フケン・文殊・十六羅漢立申候。願主水戸仏国寺十八世木食観海

という一文が刻されていて、「願主水戸仏国寺十八世木食観海」とあることから、これが羅漢寺境内に築かれるべき建造物の大概を描いたものと知られる。「羅漢堂の内陳には小高い坪山を築いて高麗芝を敷き、春夏秋冬、四季の草花が咲き乱れる風景はまことによく、五百羅漢は山の峯、谷に立っておられる様子で、内陣の五百羅漢は一目で拝観でき、二重の上層には釈迦・普賢・文殊・十六羅漢が安置されており、その上層まで参詣の衆徒が登れるよう設えてある」と羅漢寺の建築構想を説明している。願主の仏国寺十八世木食観海は、これを勧進の折りに印施し、喜捨を乞うたのである。

観海は木喰行道に木食戒を授けた人として知られる。行道の自伝ともいうべき『四国堂心願鏡』に、「ソノノチ日本廻国修行セント大願ヲ、ヨコシテ、法身スル事四十五歳ノ年ナリ、ソノ節ヒタチノ国木喰観海上人ノ弟子トナリ、木喰カイヨツギ、ヨヨソ四十年ライノ、修行ナリ」とある。行道四十五歳といえば宝暦十二年（一七六二）のことで、『水戸市史』中巻（二）によれば羅漢寺が失火で灰塵に帰した年である。行道の研究者には、行道は師観海に協力して羅漢寺の再建に尽力したはずであり、であれば杳として不明な行道の入滅地も観海の墓地のある仏国寺の奥院であろうと考えるむきも少なくない。しかし、行道は右の一文のほかには、師観海について、羅漢寺について何も語ってはいないのである。

『岩谷山仏国寺由来』（ガリ版刷、無刊記）によると、仏国寺は紀州高野山宝性院末の古義真言宗寺院で、開山は弘法大師、本尊は十一面観音、陽成院の勅を受けた教導上人が慶長三年（一五九八）六月に中興したという。また同書は、仏国寺十三世禅海が享保三年（一七一八）に編纂したという『岩谷山縁起巻上』と『岩谷山秘伝巻下』を載せ、かつて弓削道鏡が仏国寺に廬舎を結んでいたところ、孝兼天皇が尋ね来て、宮殿を構えてともに交会偃仰の日々を過ごしたと伝えている。享保のころには、本尊の十一面観音は孝兼天皇の化身とされ、俗に大開観音と称されていたと記している。

（関口静雄）
（あべ　みか　歴史文化学科）
（てらつ　まりえ　生活機構研究科生活文化史研究専攻修了生）
（せきぐち　しずお　歴史文化学科）